

---

# スイム魂

大樹の心

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

スイム魂

### 【Nコード】

N7853X

### 【作者名】

大樹の心

### 【あらすじ】

8人の水泳選手を教える事になった、元スイマーの熱い水泳コーチ。そのスポーツクラブに起こる数々のトラブル。そんな問題を一つ一つ解決をして『熱い気持ち』で心を掴み目標を目指していく。ストリートだけど深くてもしるくて感動できるわかりやすい話です。水泳の良さがわかると思います。

## スイミングとフィットネス

立ち並ぶビルやマンション。駅から程近いその場所は、住宅街でもオフィス街でもない中立な位置づけ。生活的環境も整っているが、働く男女も行き来する……。そんな場所だ。そこに、一際目立つた存在感と大きさを聳え立つ白い建物がある。

『フィットネスクラブ』

プール・ジム・スタジオなど、ただの娯楽ではない健康や美を提供する大型スポーツクラブだ。もちろん、無料で開放された施設ではなく会員制の有料施設。そんな有料施設に通う人達は、夜なら仕事帰りの会社員やOL、昼間なら美に気を配り続ける主婦層がほとんどだ。

そんな立派な清潔感ある施設の前に、大きなバックを持った1人の大柄な男性が仁王立ちをしていた。

男「……………ここが……………これから俺が働くプールか……………」

その笑顔からは、健康を提供する爽やかさとは違い、ちょっと暑苦しいような情熱を感じる。

歳は30代前半、スポーツジャージに身を包んだ見た目から、熱血体育教師を思わせる。男性はそのまま意気揚々と、まっすぐにその施設内へと足を運んだ。

晴人「こんにちは！！今日からここで働かせて頂く事になりました、

ミスモトハレト  
水元晴人です！！宜しく願いします！！」

元気良すぎて少し怖さを感じてしまうほど気持ちが入った熱い挨拶。そんな場違いな熱血を男性から感じとったのか、受付の女性は、戸惑い焦りながら答えた。

受付女性「あっ！は．．．はい。こちらが、スタッフルームになります．．．．」

案内されたスタッフルーム。中まで付き添ってくれた受付女性が、1人のスーツ姿で細身の年配男性に目を向けた。

受付女性「店長。今日からこちらに配属になると言っていた新人の方が見えています。」

仕事中で忙しいスタッフルーム、みんなそれぞれの事務仕事に手をつけている。施設の外観やジム・スタジオなどの落ち着いた爽やかさとは違い、このスタッフルームには間違いないサラリーマンとしての忙しい『仕事』が広がっていた。そんな仕事の手を一瞬止めると、その店長が面倒くさそうな顔で受付女性に指示をした。

店長「あっ．．．ああ．．．彼ね．．．．とりあえずあつちに座ってもらって！」

言われて案内されたスタッフルームの奥に晴人が座ると、待たされる事数分。すぐにその店長がやってきた。

店長「おーおー君ですか．．．今日から宜しく願いますね．．．．」

小休憩のついでに話をするかのような口調の店長。その店長がゆっくり目の前の椅子に座ろうとした。

しかし晴人は、店長が椅子に座るよりも早く、機敏な起立をすると大きな声をスタッフルームに響かせる。

晴人「こんにちはヘッドコーチ！今日から宜しくお願いします！！特技は水泳！！とある小さなスイミングクラブで小さい頃から水泳をずっと続けてきました。高校の頃には水泳の日本選手権にも出場した経験があります！！水泳指導経験はまったくありませんが、一生懸命に競泳選手指導をさせて頂きます！！今日から色々お世話になります！！」

それを聞いた店長は、熱血漢丸出しのその態度に一瞬驚き、半笑い顔を作った。

店長「ちょっと……ちょっとまーまー落ち着いて座って……とにかく今日から一緒に働く仲間ですから、宜しくお願ひしますよ……ははっ……はっ……」

中腰の店長が晴人をゆっくり座らせると、喋り足りない晴人が椅子に座りかけながら言った。

晴人「あつ、今日からこのクラブに在籍している中高生の選手コースの指導をさせて頂けると聞いています！！自分は泳ぐ事は出来ませんが、指導経験はまったくないので、ヘッドコーチのお手伝的な形でやる事になるのでしょうか？色々勉強させて頂きます！！！！」

晴人が言う、選手コース。それは、一般的な1週間に1回や2回といった習い事をする水泳スクールとは違い、毎日プールに通い続け、

将来はオリンピックや日本選手権など大きな大会に出場する事を目標とする競泳選手を集めたコースだ。その選手コースは特別で、指導方法も練習内容も深く難しい。その指導方法を店長から教われると思った晴人の、熱い魂のこもった挨拶だった。

店長「ちょ……ちょつと待つてくれ君。焦りすぎないで。ゆっくり説明させてもらうから……」

とにかく気が早く、自分の伝えたいその事だけを次から次へと口走る晴人に、少し動揺する店長。その晴人のペースを崩し、自分のペースに持つていくように店長がゆっくりと話し始めた。

店長「はい……まず……選手コースですが……選  
手の方は君一人でやってもらいます。」

「よし!!—つ—つ教えてやるから、しっかり俺についてこいよ!  
!」そんな店長の熱い一言を期待していた晴人は、自分の想像とはまったく違うあっさりした一言に焦り驚いた。

晴人「え!!!??自分一人ですか??いやっ……まったく水泳指導経験ないんですよ?……しかも、ヘッドコーチを差し置いて自分がトップの選手を教えるなんて……」

それを聞いた店長が、王様のように背もたれに身体をゆだね、面倒くさそうな態度を見せる。

店長「いやいやいいのいいの。選手の指導なんかは適当にやるときゃいいからさ……とにかく、他の仕事を頑張ってくればいいの!あっ後、私はヘッドコーチじゃなくて、店長ですから、店長!ヘッドコーチなんて言い方はもう古い!ここは子供だけが通

うような古いスイミングクラブじゃなくて、大人が通う最新のフィットネスクラブだからね！」

目を開き、口も半開き……あまりにも想像と違う店長の態度を目の前に、晴人は言葉を失いあつけにとられた。それでもまた大げさに首を横に振り、我に返るように自分の目的と、この仕事を選んだ理由を真剣な眼差しで語りだした。

晴人「自分は競泳選手を教える為にここへ来たんです！自分が経験してきた競泳と言う世界……日々仲間と戦い競い合って……時には泣いて、時には笑って！そんな熱い気持ちを持った水泳選手達の指導をする目的で、この社員になったんですよ！！それなのにその競泳を適当にやれっ！？？……適当になんか、出来るわけないじゃないですか！！！」

これから上司になる人へのきつめな言い方。それでも、店長の言葉に納得いかない晴人は、『自分は間違っていない！』というまっすぐな目で言い放った。

……ドン！！！！

一瞬の沈黙を終えた店長は、目の前のテーブルを強く叩き立ち上がった。

店長「いい加減にしてくれないか君！！ちょっとこっちに来なさい！！！！！！」

晴人「あつ……ああ……え??はっ……はい!。。。」

晴人の腕を掴み、強引気味にスタッフルームからお客さんのいるジムへと連れ向かう店長。

さっきまで温厚そうに見えた店長がいきり立ってテーブルを叩くその姿に驚いた晴人は、言われるがままに身体を店長に預け、絡まりそうな足で引っ張られていった。

店長「見なさい！！うちの施設を！！」

そのジムを見ると、そこには数多い大人の男性や女性が、ダイエットや健康・運動を目的に身体を動かす姿があった。

店長「大人の会員が3000人！子供は500人！うちの施設はね・子供主体じゃないんだよ！！大人中心！！下に見えるプールエリアも見て見なさい！！」

そう言いながら店長が指差すのは、斜めに下にあるプールが見える大きなぞき窓。晴人はゆっくりそこからプールを覗き込んだ。

店長「1日のほとんどの時間、大人がプールを使っているんだ！！今はこの業界はこれが当たり前！！競泳なんて儲からない仕事、お金にならないんだよ！！！！水泳に熱い指導をするコーチなんてここには必要ない！！それがわかるまで・・・・・・ここで、この施設をじっくり見ていなさい！！」

小さい頃からずっとスイミングクラブで続けてきた水泳。晴人が教わってきたその指導者達は、熱意があつて水泳熱心な人ばかりだった。そんな指導者である『コーチ』に憧れ、この道を選んだ晴人。それでもこのフィットネスクラブには、そんな水泳指導に熱くなる者は誰もいなかった。むしろ、そんな競泳を馬鹿にしてけなす態度をとる上司。あまりにもひどい落差ある現実だ。

期待に胸いっぱいだった晴人は、その落差ある現実を目の当たりにして、言葉なくそこに立ちすくむ事しか出来なかった。

## 潰したい選手コース

シヨックを受けた晴人は、肩を落とし力なくスタッフルームに戻った。

店長「あつ水元君、戻ったか・・・君の席はそこ！！隣にいる女性スタッフが君の世話役だ！仕事内容を教えるように言っているから、しっかりと聞いて仕事をどんどん覚えてくれよ！」

言われた席に近づくと、何かの上から押さえつけられたかのように『ガクツ・・・』と席に座りこんだ。力なく座っていると、隣の女性が笑顔で肩を叩きしゃべりかけてきた。

女性「こんにちは！！新人の水元さんですよね？？私は、今年の4月に入社した森下彩香モリシタサヤカって言います。宜しくお願いしまーす。」

彼女が、さつき店長が言っていた世話役の女性。

長い髪は深い茶色、細身でスラッとしたスタイル。見た目や喋り方で軽そうに見えてしまうが、実際はそれとは違う活発さと元気が目立つ20代前半の女性だ。

簡単な挨拶を終えた彩香が、すぐに晴人の耳元に口を近づけヒソヒソ話を始める。

彩香「あつ・・・さつき店長と揉めましたよね・・・ダメですよ店長と争ったら・・・あの人、仕事命の堅物ですから・・・何言っても納得しませんよ。」

それを聞いても『あつ……はい……』と力ない小声でしか返事を返せない晴人。そんな元氣のない晴人など気にせず、彩香はどんどん話を先に進めていく。

彩香「……しかも、言い争ってた内容って選手の事でしたよね??店長の前で競泳の話は絶対にダメ!あの人、水泳選手が一番大っ嫌いなんですから。売り上げにもならないでプールのコースばかり使う選手コースを、いつか潰してやろうと思っているらしいですよ。」

晴人がこの仕事を選んだ理由、それは選手コースの指導がしたいから。それを潰すというその内容には肩を落とした晴人も、さすがにしっかりと反応をした。怒りのこもった睨む顔で彩香を見つめる。

彩香「そ……そんな顔で見ないで下さいよ……とにかく、このままここで社員としてやっていきたいんなら、選手コースにはあまり熱くならず、営業や売り上げにどんどん貢献していった方がいいですよ!!それに……」

店長への不信感が募り始めた晴人。そんな晴人に、彩香はまた大きな悩みを抱えさせる一言を続けて言った。

彩香「それに……うちの選手達はまったくやる気のないどーしよともない選手ばかりですしね!」

そこまで言うつと耳元から顔を離し、わざとらしくも見える大きめな声で晴人への説明をアピールした。

彩香「じゃっ!!仕事内容を説明しまーす。晴人さんにやってもらうのは、まず、機械室の薬品類の管理と……大人向けイベント

のポスター作りと・・・」

そんな説明などもう頭には入らない。ただただ『店長への不信感』  
という苛立ちと『やる気のない選手達』に対する不安で頭がいつぱ  
いになっていた。

自分の想像とは違う職場の環境。そのあまりにも違いすぎる環境が、  
大きな壁という形となって晴人の前に立ちはだかつてきた。

## 態度の悪い選手達

時間は18時30分。この時間から2時間の20時30分までが選手指導の時間だ。

『やる気のない選手』と言っていたその言葉、ついにその選手達との初対面を迎える。

晴人はこの日のために用意しておいた自分が選手だった頃の日本選手権のポロシャツを手に取った。

JAPANと胸元に書いてある思い出のポロシャツだ。それに着替えると、空気を大きく吸い込み、ため息混じりにその息を吐き出した。そして、もう一度その全ての不一致を振り払うように『よし！』と独り言で気合いの声を漏らした。

スタッフルームから一直線に伸びる階段。その階段を下りるとそのままプールサイドに行く事ができる。腕を振りながら気合いたつぷりの晴人がその階段を駆け下りていくと、すぐにその晴人を呼びとめ引き戻す声が……

店長「おい!!!水元君!!!……ちよっところちに來なさい!!!」

晴人「???なつ……なんですか!!!ヘッドコーチ……いや違った、店長!!!今から選手と初対面の大事な時なんですから!!!」

しびしびといった感じで戻る晴人を見ると、すぐに店長が雷のように怒鳴り散らした。

店長「何ですかじゃないだろ!!!なんだその格好は!!!お客さんの前はうちのユニフォームを着ていないと行かせないぞ!!!何が」

APANだよ！！そんなポロシャツは捨ててしまいなさい！！いつまでも自分の過去に縛られてるんじゃないよ！！それとも一つ・・・今日来る時もジャージ姿だったが、うちの会社はスーツ出勤だからな！！コートではなく会社員らしく、明日からはスーツで出勤するように！！」

晴人のお尻を強く叩き、イヤミったらしくにやりと笑う。

そんな態度にムカつきもしたが、今はそんな事でも揉めている暇はない、営業ユニフォームに着替えて仕切り直しの初対面。堂々とした歩き方で選手達の前に歩いていった。

その姿をプール上からのぞき窓から見つめる男性スタッフ。その横には、プールサイドから戻って来た店長の姿もあった。2人は企みある見下した顔で晴人を見つめた。

男性スタッフ「どーですかねえ彼、長く続きますかね・・・この仕事。」

そう話すのは、男性スタッフの木島 キジマタケヒサ 武久。彼は、出世を狙って店長に入り浸りをする、いやらしいインストラクターだ。全てが店長に忠実で、仕事も出来るかなりのエリート。そんな彼も、もちろん店長と同じく『選手コースを潰す』という思惑を抱いている一人だ。

店長「・・・あれじゃあ無理だろう。もって1ヶ月・・・彼が求めている世界と、ここの世界はまったく違うからな。」

木島「早く彼の役目を果たして、やめてくれればいいんですけどね・・・」

店長「……そうだな。『選手コースが潰れる』という理想の結末と一緒にな。」

二人の悪巧みをするその姿は、江戸時代の『おぬしも悪よのう……』  
『そんな空気を作り上げていた。』

実は、晴人を新人社員として選んだのには理由があった。『熱すぎるコーチ』と『やる気のない選手』。その不釣り合いから大きな揉め事を起こし、共倒れのような結末にさせようとしているのだ。

店長「さあ……水元晴人君。お手並み拝見ですよ。」

プールサイドでは晴人が選手の前に堂々と立ち、今まさにその挨拶をしようとしていた。

晴人の担当する選手達は全部で8人。高校生男子4人と中学生女子4人だ。晴人は、水着に着替えて準備万全な8人を目の前に、その緊張感ある第一声を口にした。

晴人「はじめまして。今日から君達を指導する事になった新しいコーチ、水元晴人だ……。よろしく。自分も小さい頃から競泳をやっていて、高校時代は日本選手権に出場した経験がある！正直、指導経験はまだないが、自分が選手だった頃の経験を活かして君たちに水泳を教えていきたいと思っている。まず最初にみんなに聞きたいのが……。」

ふと晴人が視線を変えると、話している途中なのに勝手に泳ぐ準備を進める4人の女子選手達が目に止まった。そして準備を終えるとすぐに、晴人を無視してプールの中に入ってしまった。

晴人「おっ・・・おいちょっと待て！！まだコーチが話をしている途中だろ！！何勝手にプールに入ってるんだ！！！」

あまりに不謹慎な行動を取る女子選手達。晴人はそんな選手達の態度から、コーチらしく少し上から目線の強めな言い方をした。

拓也「あっ・・・駄目ですよ。彼女らいつも自分達で練習メニュー作って勝手に練習してますから。」

そう言ったのは男子選手の一人、拓也<sup>タツヤ</sup>。真面目そうな外見をした少し小柄な体格の高校2年生だ。それを聞くとすぐにまた別の男子選手が晴人に冷たく言った。

翼「それから自分達も自主練させてもらいますから。それと、2時間練習はきついんで1時間半で帰ります。」

感情表現がない無表情のまま、淡々と平坦な口調で喋る彼の名前は<sup>ツバサ</sup>翼。身長が一番大きい高校2年生。勝手に自分達の練習時間まで変えてしまった。

挨拶なしで勝手に自分達の練習を始めてしまう女子選手。やる気もまとまりも感じない男子選手。完全にコーチを無視した自由気ままな行動と言動・・・まさに、『うちの選手はまったくやる気のないどーしようもない選手ばかり』というあの時の言葉通りだ。

晴人「ふざけるな！！！！」

晴人は、持っていた名簿や資料や練習メニュー、それをプールサイドに叩きつけ撒き散らしながら叫んだ。

その行動は、ここまであまりにも自分の理想と違いすぎた職場の環

境、それに対する八つ当たりのようにも感じた。  
感情的になってしまった晴人は、その隠しきれない自分の気持ちを選手達に熱くストレートにぶつけた。

晴人「俺はお前達を教えにここに来たんだ！！選手の指導をする為にこの仕事を選んだんだよ！！それなのに選手達にそんな態度されたら・・・俺はどうしたらいいんだ！！？俺は、お前らを速くさせたい！！頼むから真剣に話を聞いてくれ！！」

全てを吐き出すような心の叫び。晴人の姿が少し可愛そうに見えてしまうほど、その言葉にはまっすぐな感情がしっかりと込められていた。

一瞬の沈黙・・・・・・・・さつきまで冷然と自分達で練習準備を進めていた選手達も、その動きを止め、それぞれがそれぞれに何かを思い悩む表情をした。

沙羅「・・・・・・・・信用・・・・・・・・出来ないんですよ・・・・・・・・」

沈黙を破ったのは女子選手の一人、沙羅<sup>サラ</sup>。その発言で、みんなの注目を集めるとその続きを語り始めた。

沙羅「今まで、何人ものコーチが私達を教えてくださいました・・・・・・・・それでもみんな、結局信用できないんです！！やる気もなくて・・・・・・・・水泳の事も全然分かっていなくて・・・・・・・・」

すると、そのすぐ横にいた別の女子選手、美月<sup>ミツキ</sup>も口を開いた。

美月「私達はもう中学生です！男子だって高校生。小学生じゃない

んだから見ればすぐに分かります。やる気があるのか・・・本当に水泳の事わかって教えているのか・・・コーチを見ればすぐに分かるんです!!」

拓也「みんな・・・やる気がないわけじゃないんだ。不良みたい  
に、曲がっている訳でもない。ただただ・・・もうコーチに騙され  
るのには、うんざりなんです。」

翼「ころころころころコーチが変わって、やり方も変わって、結局  
みんな何もわかっていなくて・・・もうそんなのがうんざりな  
んですよ・・・」

またしても沈黙、いやな空気が流れる。その様子を天窓から見下ろ  
す店長が、小声で呟いた。

店長「さあ・・・どう対応しますか・・・水元君・・・」

晴人「・・・ふう・・・」

肩から息を吐くようにため息をつく、晴人は落ち着きを取り戻し  
ながら、叩き付けた資料をゆっくりと拾い集め始めた。それを拾い  
終わると、じっくりその多すぎる資料に目を通す。

晴人「君が山田 翼か。高校2年生・・・平成6年4月25日  
生まれだな。種目は背泳ぎ。11月23日・・・100m背泳ぎ  
が59秒54。12月17日の50m背泳ぎが28秒9・・・」

翼「・・・何でわかるんですか？大会のタイムまで・・・」

晴人「その隣が・・・鈴木 拓也、高校2年生。平成6年9月3

日生まれ。種目は自由形だな。11月23日の50m自由形が25秒97。12月17日の100m自由形が56秒84・・・」

そこまで読み上げるとその多すぎる資料から目線を外し、選手達をまたしつかりと見つめ直した。

晴人「それだけじゃないぞ。調べられる限りの全員の細かい資料がここにはある。小学校の頃からの大会タイムから練習タイム。今までの練習時間と泳いだ距離、更には身長体重。お前らが選手コースに入ってから全てのデータだ。」

拓也「……………全部調べたのか……………??そんなに調べるのって……………どれだけ時間かかるんだ……………?」

選手達の信用していなかったコーチに対する視線。一瞬だが、その視線が驚きと少しの期待の視線へと変わった。

晴人「もう一度言わせてくれ……………俺はお前達を教えにここに来た!!選手の指導をする為にこの仕事を選んだんだ!!今までお前達が教わってきた気持ちの無いコーチ達とはわけが違う!!俺は本気で君らを速くさせたいんだよ!!!!」

沙羅「もういいよ!みんな早く練習しよう!!もう騙されない!!私達……………そう決めたでしょ??」

不信感から信頼……………一瞬だけ変化を見せた選手達の気持ち。それでもその気持ちをまた、『正当化』に戻るかのような沙羅の言葉だった。

何が正しい『正当化』なのか……………その若さでは彼女達にはまだ分からない。そんな彼女達は、今まで通りの『不信感』を頼りに

それを『正当化』に戻していた。

自分達で作った練習メニューで泳ぎ始める女子選手達、それを見た男子選手達も、我に返るようにその横で『さうとっ……』といった動きをしながら泳ぐ準備を始める。

結局変えることが出来なかった選手達の心。それでもその中の1人、拓也は一瞬また晴人のほうに目をむけて心迷わす表情を作った。

翼「おい！拓也！アップ始めるぞ！！」

その声に拓也が気づくと、他の選手達は皆キャップにゴーグルをつけて、泳ぐ準備万端の状態だった。

拓也「あっ……ああ……今行くよ……」

拓也は口ごもる言い方であわてて答えた。

そんなやり取りを、相変わらず天窓から観賞している悪巧みの2人。

木島「結局彼もこんなもんですね。このまま行けば……やっと選手コースを潰せる……」

思惑通り……そんな事を思う木島の横で、店長はプールを気迷いするような目で見つめていた。

店長「……何かが違う気がする……今までのコーチとは何か違う癖がある……もしかしたらあいつ……本当に選手コースをまとめてしまいそう……」

木島「何を言っているんですか店長！！そんな事になったら今より

営業に支障をきたしますよ！！！そんな事、あつてはならないです  
！！」

木島がそんな不安を言い放つと、それを聞いた店長が怒りにも感じ  
る悪巧みの顔でプールサイドを睨む。

店長「そんな事・・・させませんよ、絶対に！！」

その表情からは、何があつても選手コースを潰すという曲げられな  
い熱意が感じられた。

## すれ違いの繰り返し

数日後のプールサイド……………

晴人「よし！今日も練習メニューを作っておいたぞ！！さあ夏の大会を目指して……………頑張っていくか！！」

練習時間が集まった選手達の前に立つと、わざとらしく明るく元気に言った。

沙羅「なんでわざわざ毎日練習メニューを作るんですか？？言っただけじゃないですか！自分達で練習メニューも作るし、自分達で練習するからコーチは必要ありませんって！！」

女子選手の中でも、一番気が強くまじめな沙羅、中学3年生だ。女子チームではリーダー的な存在で一番意志も強い。一度決めたら曲げられないその性格が一言一言のきつさからも感じられた。

そんな彼女だからこそ、水泳に対しては真面目で本気、ストレートな熱意を誰よりも持っていた。

晴人「いいか……………俺は君達が俺を認めてくれるまで、毎日練習メニューを作り続ける！！練習中の2時間、どんなに俺を無視しようが邪魔と思われようが、俺はプールサイドに立ち続ける！！これが君達に見せられる、俺の本気を伝える唯一の誠意だ！！」

熱く語る晴人。それでも相変わらず、そんな熱意の伝わらない沙羅は……………

沙羅「あっそ……………勝手にやってればいいじゃないですか！！」

冷たい一言であしらう。

こんなやり取りを、もう何日も続けている。いつまでたっても心を開いてくれない選手達。結局この日も、いつも通りの挨拶なしでみんな勝手に泳ぎ始めてしまった。

選手達の為に何もする事が出来ない晴人は、ただただそこに立ち、選手達の泳ぎだけを見続けた。そんな晴人をスタッフルームからプールサイドにやってきた木島が、鼻につくむかつく態度で声をかけてきた。

木島「おい水元！ちょっと話があるからスタッフルームに来てくれないか??」

晴人「何ですか??木島さん！今指導中ですよ・・・」

木島「何が指導だよ！あいつら勝手に練習してるんだろ!?!とにかく早くスタッフルームに来い！」

先輩肌というか上司っぽくというか、そんな上から目線を利用した強引な言い方。確かに上司で目上の人ではあるので、晴人は仕方なくといった表情を見せながらスタッフルームに上がっていった。

店長「いつまでこんな事を続けているつもりだ!!!」

上がるとすぐに、店長からの怒鳴り叱りが。

晴人はビクツと身体を震わせその驚きを表現すると、廊下で立たされた子供のように、じっと押し黙り肩をすくませた。

木島「店長。ちなみに、このポスターも作れていないし、このチラ

シも準備できていません。ほんっ……とにまったく何も手をつけていない状態です。」

木島が言うのは、晴人が担当している事務仕事の事。見るとそこには、何も手がついていない残された仕事如山積みになっていた。

店長「自分の仕事全てほったらかしにして、選手の練習メニューを作るのに1時間。選手の指導に丸々2時間。合計3時間も選手の事だけをやって……拳句の果てに、選手はその練習メニューには手をつけず、自分達で勝手に練習をやっているだど??まったく無駄な時間を3時間も費やしているって事なんだぞ??わかっていいのか!?水元!」

晴人「すみません店長……だけど自分は……」

店長「言い訳はやる事をやってから言ってくれないか!?!?」

店長は終わっていない仕事である山積みの紙を、晴人の前に撒き散らした。ここまで怒らせてしまっっては、もう何も言い返せない。仕方なく晴人はその資料を拾い集め、プールサイドには戻らずその仕事に手をつけ始めた。

ひと段落をして、急いでプールサイドに戻ると練習を終えた選手達がプールを上がり、もうすでに片付けを始めている所だった。

晴人「ごめんごめん!!どうしても外せない仕事があつて……スナップルームに戻っていたよ……」

沙羅「何がごめんごめんですか??誰もコーチの事なんか待っていませんでしたよ。男子達はもう帰ったし、私達ももう上がる所です。

「晴人「ああ・・・そうか・・・」

そんな事は分かってはいたが、あまりにもそっけない沙羅からの一言に、晴人が返す返事は小さく弱弱しかった。

舞「どこが誠意だよ・・・結局・・・なんだかんだ言っても練習なんて見る気がないんですね！」

追い討ちをかけるような冷たい一言を言ったのは、女子選手の中でも最年少、中学1年生の舞だ。

晴人「いやっ・・・待ってくれよ・・・今日はほんと仕方がなくて・・・」

華「コーチが言い訳をするんですか??情けないですよ。」

そう言ったのは舞とは実の姉妹である、姉の華。中学2年生だ。

美月「何を言っても正直私達・・・コーチの事は信用しませんから。さっへ行こうっ。」

心に突き刺さる言葉ばかりを、ズキズキ言いまくる女子選手達。役立たずで無力な自分・・・

仕事は出来ずに怒られるし、選手の練習も見られず信頼を失う。

片付けを終え更衣室に去る4人の後ろ姿を見ながら、晴人はそんな情けない自分の存在を強く痛く感じさせられた。

## つながり始める心、離れる心

夜も遅くなり始めた頃、やっと溜まっていた仕事も一通り終わった晴人が、帰り支度を済ませてスーツ姿で職場を後にした。外に出ると、そこに学生服を着た高校生が1人。

晴人「……………??拓也……………」

そこに立っていたのは、男子選手の中でも一番水泳を真面目に努力し続ける拓也。何か言いたそうな、うつむき黙る直立で立っていた。

拓也「途中まで……………いいですか？」

ためらいながらも、何とか言えたその言葉。そんな拓也を見て晴人はこころよくそれを承諾した。

拓也と歩く駅までの夜道……………なんだか妙な緊張感とテレがある。歩道の横にある車道をたまに走り去る車が、一瞬だけその空気を变えるようにライトの灯りとエンジン音を撒き散らした。少し道を進むと、その緊張感をほぐすように晴人が優しい笑顔で拓也に話しかけた。

晴人「なんで……………俺の事を待っていたんだ??」

明らかに待ち伏せを思わせる拓也の行動。それに対して、ストレートに質問を投げかけた。

拓也「いや……………別になんでもないです……………ただ……………」

晴人「ただ??」

笑顔の表情で心の中に入り込もうとする晴人を見て、拓也は閉ざしていた心を少しずつ開き始めた。

拓也「ただ……コーチはいい人ですよ……」

晴人「???いい人??それはほめられたって事でいいのかな??ありがとう!」

満面の笑みで返事を返す。そんな単純さで喜びを表現する晴人の姿を見て、拓也は更に正直な気持ちさをさらけ出した。

拓也「正直言つて……俺はもうコーチを信じてもいいです。」

自分の意見は全て否認されて、仕事に対しても文句も言われ続けて、選手達にもずっと信用してもらえなかった晴人。

仕事に就いて初めて聞く事が出来た晴人への信頼の一言。

……その一言を聞き、晴人は涙ぐみ素直に嬉しさを表情に見せた。

拓也「だけど……」

一瞬間の間をおくと、言いづらそうにその続きを話し始めた。

拓也「だけど……自分一人だけコーチを信じて、コーチの練習をやっても……選手コースの雰囲気壊れてしまうだけ……そんなんじゃない、みんな速くなれないし、仲間にもなれないと思う。」

裏切りにもとれるその行動。みんなが右を向いているから右を向かなければならない。それは、みんなに合わせているわけではなく、それがチームだからという事を言いたいのだ。

拓也「みんな絶対にコーチの事は信用しないとします。特に女子達の意味はすごく堅い。だから、俺から言えるコーチへのアドバイス。それは……選手コースは諦めて、他の仕事に集中して下さい。」

真面目すぎる拓也だからこそ辿り着けたゴールの答えだったのかもしれない。高校生とは思えないほど、他人の事も考えたまっすぐな忠告だった。

晴人「俺は諦めない。何があってもみんなの信頼を勝ち取って、絶対にコーチとしてみんなの力になってみせる!!」

拓也に負けなймаつすぐな目で答える。その答えを聞いた拓也は、更に自分の本心を全て吐き出した。

拓也「俺だってもう高校生です。分かっているんですよ……プールの雰囲気。あのプールは選手コースをなくそうとしているんです。だから、選手コースの担当コーチには冷たく当たるし、いろんな仕事を押し付けるんだ……そうやって選手コースの練習をさせないようにしてるんだ!!でも……俺達はいいんです。選手コースがなくなるのが、潰されようが全然いいんです。……」

そこまで言うと、拓也はうつむいていた視線を晴人に向けて、握るこぶしを更に強く震え固めさせた。

拓也「夏まではもってほしい！何があっても夏までは選手コースが続いてほしいんです！……ただ……このままコーチが強がっていると、今すぐにも選手コースが潰されちゃいそうで……」

熱意を込めれば込めるほど、店長との衝突も激しさを増す。それによる早すぎる選手コースの廃止……待ち伏せしてまで伝えなかったのは、まさにそれだった。

それを聞いた晴人は拓也が伝えたいその部分よりも、自分が気がかりな部分だけを反論のように質問で返した。

晴人「夏に何かがあるんだ？もし良かったら教えてくれ、夏の目標を！みんなで力あわせて、その目標を達成させよう！俺も出来る限りの指導で、手伝ってやるから！他のスタッフに何言われても、俺がやってやるからさ！！」

変わらず安直な変わらない態度をとる晴人。拓也はそんな晴人を苛立つように睨んだ。

拓也「それが逆効果だって言っているじゃないですか！！なんでわからないんですか？その熱意で俺達の目標を壊さないで下さい！！」

そこまで聞くと、晴人は今までの笑顔だった顔を、心あるきつめな顔へと変えた。

晴人「無理だよ！！自分達で速くなるなんて無理なんだよ！！水泳ってそーいうもんだろ？小さい頃から水泳やってきてわかっているだろ？？コーチがいなくて、速くなんかなれないんだよ！！」

コーチの存在の大きさ。それは晴人も、自分が水泳選手だった経験から良く分かっていた。

自分の練習だけで速くなれるほど水泳は甘くはない。

ただの安直ではないというその気持ち、その台詞からしっかりと伝わってきた。それに気付いた拓也は、晴人を見る目を歩道に変え、晴人が言う事もわかってはいるがその気持ちを変える事なく叫んだ。

拓也「わからないならもういいです！もしコーチのせいで、選手コースがなくなったら、一生恨みますからね！！！！」

思い乱れる拓也は、そんな捨て台詞を言うと、駅の改札口に向かって走り消えていった。

少しだけ繋がりは始めた心が、またすれ違いを始める。そしてついに磁石のN極とS極のようにはらばらになってしまった。お互いに言いたい事も、伝えたい事もしつかりとわかっている。それでも素直に意見を聞く事が出来ない複雑に入り乱れた問題・・・・・・・・・・拓也の後姿を見る晴人のわだかまりがある悔しい表情。

その身体は、どこにも向けられない怒りの矛先を、身体の中に押し殺すように激しく震えていた。

## 俺達の目標

晴人「よし！今日もみっちり2時間！しっかり見届けるぞ！！」

翌日の練習。拓也とのやり取りがあつた後でも、何も変わらず水泳指導をやる気満々で選手の前に立つ晴人。それを見た拓也は、冷たい目を合わせるとすぐに流し目のように視線をはずし、練習準備を始めた。

店長「晴人！！！！！！！！！！」

店長の激怒した声がプールサイドにこだまする。いつもならさっさと泳ぎ始める選手達も思わずその動きを止めてしまった。

店長「この仕事はどうするんだ？？？えー！！！！！！？」

あらゆる店長がプールサイドに投げ落としたそのプリント用紙。それは、またしても手をつけていない晴人の事務仕事だった。

店長「何回言つても、何回教えても一向に直らない！！もう私も我慢の限界だ。これ以上こんな無駄な時間に付き合つて、ただ見るだけの仕事を続けるようなら会社を辞めてもらう！！選手コースも………解散だ！！！！！！」

『解散』の一言に、普段は感情をあまり出さない選手達が一瞬にして目を見開いた。そして、誰よりも拓也が晴人を見ながら『だから言つただろ！！』という怒り目を投げかけた。

店長「さーどーするんだ晴人？答えは簡単だ！！こんな自分勝手に

やる気のないやつらはほっておいて！早くスタッフルームに戻って仕事をしなさい！！！」

その台詞を聞いた晴人が、事もあるつか今度は逆に店長を大声で怒鳴り返した。

晴人「自分勝手にやる気のないやつら??今すぐ彼らに謝って下さい!!！」

興奮が収まらない晴人は、更に店長に近づくように一歩前に足を踏み出す。

晴人「悪いのはコーチです!!こんな環境にしてしまったコーチがいけないんです!!それなのに選手達をけなすなんて…………今すぐに選手達に謝って下さい!!！」

そこまで言うと、今度は涙ぐみながら選手を思うその気持ちを語り始めた。

晴人「この2時間は、無駄な時間じゃないんです!!彼らにとって大切な時間なんです!!大切な時間だからこそ、コーチとしてしっかり見届けて……………しっかりそばにいてあげたいんです!!自分……………この時間だけは絶対にここに居続けます。それが自分の仕事だから……………今、自分が出る一番の仕事がそれだから、自分はここに何があっても立ち続けます!!」

理解ができないからぶつかり合う。ただただ自分の事だけを考えていても、相手の本心はわからないものだ。

『選手達が泳ぐこの時間』

それが選手達にとってどれだけ大切な時間なのか……………

役に立たなくても見届けてきた選手達の練習……その行動は、選手達の気持ちを理解している事を形として表していた。そんな晴人の行動の意味を知った選手達は、晴人が叫び訴える姿を見て、いつしか心を奪われ始めていた……しかしそんな選手達の気持ちの変化にも気付かない店長が、とどめの様な冷たい一言を言う。

店長「それが……答えでいいんだな??この山積みの仕事には、手をつけないって事だな??」

ここまで言っても伝わらないその気持ちに悔しそうな表情を浮かべると、晴人は店長をまっすぐ見つめ直した。

晴人「……この鍵を預かせて下さい。毎日、ここに泊まって、夜のうちに必ず与えられた仕事は片付けます。満足いくように手を抜かず、ちゃんとした仕事をします!だから……」

・この時間だけは、ここに居させて下さい。」

強情で聞き分けが悪いと言うよりは、自分が正しいと信じているその目。自分の時間を削ってでも選手の時間を大切にしたいという晴人のうそのない本心だ。

2人はしばらく黙り見つめあった。

店長「一つでも仕事に不備があったら……すぐに選手コースを降りてもらおう。そして、選手コースも解散だ。約束できるな?」

晴人「はい!ありがとうございます!」

嬉しそうに頭を下げる晴人。店長はその姿を見ると、齒軋りをさせ

た怒りの表情で悔しそうにスタッフルームへと帰っていった。

店長が居なくなるのを見ると下げた頭をすぐに上にあげ、いつもと変わらない笑顔を作り選手達に言った。

晴人「よし！これからもお前らの事をずっと見られるぞ！」

そんな無邪気さまで感じる素直な晴人を見て、選手達は驚き戸惑った。

沙羅「何考えてるんですかコーチは？変わらず私達は私達で勝手に練習やりますから！」

何もなかったかのように、いつも通りプールに入る4人の女子選手。そんな気持ちのこもった晴人と店長のやり取りを見ても、女子選手達はまだ心が動かないようだ。泳ぎ始めようとする彼女らの横で、拓也が一步前に出るとゆっくりと口を開いた。

拓也「インターハイ……………」

残りの選手達全員が拓也を見る。

拓也「うちのクラブの男子選手は4人……………みんな同じ高校です。4人で泳ぐインターハイのメドレーリレー……………その標準タイムを切ってインターハイに出場するのが俺達の目標です。」

拓也と2人で語り合ったその日。その時は教えてくれなかった夏の目標……………それを口にする拓也の姿を見た晴人が震える声で答えた。

晴人「そつ・・・・・・・・・・そうか。それが夏の目標だな。」

拓也「コーチ・・・・・・・・・・コーチの練習をやれば・・・・・・・・・・目標は叶いますか？俺達をインターハイに連れて行ってくれますか？」

晴人は、力強い表情だけでゆっくりと首を縦に振った。

そんな晴人を見た拓也は、晴人に近づき手に持つ手書きの練習メニューをとると、ゆっくりと頭を下げながら答えた。

拓也「コーチ・・・・・・・・・・今日からよろしくお願いします。」

その拓也の行動を見て、今まで黙っていた男子選手達も横に並び頭を下げる。

男子選手一同「・・・・・・・・・・よろしくお願いします！」

みんなが右だから右を向く。そうではなく、誰かが左を見たからみんなも左を見る。その左が正しいのだとわかり始めた選手達・・・・・・・・・・晴人の気持ちと行動が、ついに選手達の心を動かしたのだ。

そんなやり取りを、またプールの天窓から覗く2人の影が・・・・・・・・

木島「店長！なんであそこで首を切ってやらなかったんですか？？十分いいタイミングだったのに！選手コースを潰すチャンスでしたよ！ー！」

それを聞いた店長が、力強い顔でプールを見ながら言った。

店長「・・・・・・・・・・久しぶりに見たよ・・・・・・・・・・本物の水泳コーチ

の顔・・・・・・・・・・」

木島「・・・・・・・・・・えっ????何言っているんですか??」

木島の反応に我に返った店長が、首を横に振りながら冷静に言った。

店長「・・・・・・・・いやっ・・・・・・・・なんでもない・・・・・・・・毎日泊まりで仕事をやるって言っているんだぞ?見せてもらおうじゃないか!水泳コーチがどれだけやれるかを!!!!・・・・・それに・・・・・・・・・・」

店長が目線を晴人から女子選手に変えた。

店長「あの、女子選手達は一筋縄じゃ行かないだろう・・・・・・・・・・」

ずっと認めてくれなかった選手達、理解をしてくれなかった選手達あれだけ動かなかった選手達の心を、ついに晴人は動かす事が出来た。大きな進歩を遂げた選手コースを見ながら、晴人は達成感に満ち溢れた笑顔で初めての練習を開始した。

そんな空気の中、4人の女子達はおもむろに今までと変わらない自主練を続けていた。

## 出来ない練習

翼「なあ……もう水元コーチが担当になって何日も経つけど……どう思う??」

とあるコンビニエンスストアで立ち読みをする2人の会話。

翔太「あ……ああ……正直俺じゃあ……ついでいけねーかな」

なんだかやる気のない発言をするこの高校生。彼は、選手の翔太シヨウタ、高校2年生だ。遊び人のようなチャラさも少し感じる、軽さと適当さが目立つ今時な高校生だ。

翼「バカ！お前は練習弱すぎるんだよ!!」

4人の男子選手の中でも練習が比較的よく出来る翼。そんな翼が、普段から練習が出来ない翔太を馬鹿にする。すると今度は視線を窓の外、遠くに変えて静かに言った。

翼「でも……そうじゃなくても、きつすぎるよな……あの練習は……」

拓也と同じく真面目で、水泳に対してもまっすぐな翼。そんな翼は、晴人が作る練習内容に少しの不信感を抱き始めていた。

翔太「……おつ!!今週号、俺の好きな子がグラビアじゃね? やったあ！ラッキー」

雑誌に夢中になる翔太の横で、開いた本にも目も向けず、遠くの一点を見つめながら深く思いふける翼がいた。

その日の練習……プールサイドでは相変わらず女子選手達が自分勝手に練習を始めていた。その横で、男子選手達に今日の練習メニューを説明する晴人。

晴人「よし！！今日はトレーニング練習！！苦しくてもしっかり乗り越えて来るんだぞ！！」

すぐに顔を引きつら、苦笑いの表情で答える翔太。

翔太「あの……コーチ。昨日もトレーニングでしたよね??」

それを聞くと晴人は満面の笑みで答えた。

晴人「そーだな！水泳の基本はトレーニングだ！！どんどん泳いでその日泳いだトータルを増やして、一歩ずつ成長していこう！！なので……昨日より今日のほうが練習トータルは多いぞ！！」

日に日に練習量が増えていくその練習。そのトータル距離は、彼らが今まで練習してきた1日のトータル量とは、比べ物にならない量になっていった。

翔太「はっ……8km??8キロも泳ぐのか??おい、今までこんなやったことねーよ……出来んのかよ！拓也は！！」

翔太が、練習メニューを見ながら晴人に聞こえないような小声で拓也に言う。それを聞いた拓也が同じような小声で答えた。

拓也「やったことないけど……やってみようよ!! 出来るかもしれないだろ!!」

渋々といった雰囲気泳ぎ始める選手達、その練習がスタートした。水しぶきを上げながら泳ぐ選手達を、大声で煽り叫ぶ晴人。

晴人「いけ!! いけ!! 回れ! 回れえ!!」

練習は200m10本。泳いで休んで、泳いで休んで、を繰り返すインターバルでの練習だ。スタートして2分20秒後に次をスタートさせる。なので2分20秒以内に200mを泳いで、すぐに次をスタートさせなければならぬという過酷な持久カトレーニングだ。

晴人は200mを終えた選手達に、休む間もなく次のスタートの合図をした。

晴人「よし!! 3本目だ!! すごいけ!! よい……ハイ!!」

気合いの入ったスタート。それでも一人の選手が、その合図ではスタートをせず止まったままプールの中でうずくまっているのが見えた。

晴人「あれ?? おい!! どの選手だ!! 何でスタートしない??」

翔太はゆっくり顔を上げると、自信なさそうに声を漏らした。

翔太「コーチ……すみません。トイレ……」

明らかに練習が辛いからといったうその表情……それを見抜いた晴人は……

晴人「何言ってるんだよ！！練習途中だろ！！がまんして泳げ！！」  
と叫び散らした。

その声が聞こえてか聞こえずにか、サッとプールを上がるとトイレのほうに足早で駆け出す翔太。

晴人「ちょ……おい！翔太！！ちょっと待て！！」

結局翔太が帰ってこないまま、その200m10本の練習が全て終了してしまった。練習を終えた選手達。肩で息を吐きながら不満そうな表情を浮かべる。

晴人「とりあえず全部終わったようだな……全部間に合ったやつはいるか???いたら手を上げてくれ!!」

2分20秒で間に合ったかの質問。それを聞いた翼が、少しの憎しみも感じる言い方で答えた。

翼「いるわけないじゃないですか……そんなの……」

その反抗的にも感じる翼の態度に気が付いたのか、晴人はその嫌な空気を壊すように強気でコーチャらしい振舞いをした。

晴人「そ……そうか……。お前らの努力が足りないんだぞ!!!もつと気持ち入れてやれば出来たはずだ!!!気合いが足りないんだよ気合いが!!!」

翼「いい加減にして下さいコーチ!!!」

溜まり続けていた練習への不満が自分の中では消化し切れないほど大きくなった翼。翼はついに、その不満を晴人に向かって爆発をさせてしまった。

翼「俺達、今まで200mは2分40秒でしかやった事ないんですよ??それをいきなり2分20秒で回れって言われても、出来るわけがないじゃないですか!!!」

一気に空気が悪くなるプールサイド。

翼「まだ……リレーでインターハイのタイムも切っていないですよ……俺達のレベルを考えて下さい!!コーチ!!!」

翔太「自分がやってきた練習を、ただ俺達にやらせてるだけなんじゃないの??日本選手権に出られるような高校生とは、俺達はわけが違うんだよ!!!」

その声に反応した晴人を見ると、翼の反抗を聞いていた翔太が斜め下を見るようなふてくされた態度でプールサイドのトイレ入り口の前に立っていた。

翔太「行こうぜ……翼!!!」

翔太の言葉を聞き、プールから上がった翼は、翔太と一緒に更衣室へと消えて行ってしまった。

愕然とたたずむ晴人。それもそのはず、実際に彼らの言う通りの事

しか出来ていない自分がいたからだ。

自分がやってきた練習をやっているだけ……正直今の晴人には、それが精一杯の練習方法でしかなかった。

そんなもめ事があつたプールサイドを、天窓から見つめる彩香と木島。たたずむ晴人の姿を見て木島がそれを茶化する。

木島「やれやれ……問題が絶えないですね。選手コースは……」

そう言つて、スタッフルームに消えていく木島の横で、彩香は何かを思ふ複雑な表情を作りながら、晴人を見つめていた。

## コーチとしての成長

彩香「駅まで一緒に帰りましょ！水元さん！」

スタッフルームで仕事を終えた晴人が、ふっく……と息をつき、帰ろうかという雰囲気になったタイミングを見計らったの彩香の誘いだ。誘われた晴人も、この日は特別用事もないので、迷いも疑いもなく答える。

晴人「あっ……はい。いいですよ。」

二人で歩き始めた夜の道、妙な静けさがある喋りづらい雰囲気だ。拓也との帰り道を思い出すような少しのテレと緊張感がある。その雰囲気壊して最初に喋ったのは、晴人ではなく彩香。綾香はいきなり大胆な一言を、きつめな真顔で口にした。

彩香「自分が選手だった頃の練習をやっても駄目だぞ！！！」

突き刺さるような一言。晴人は今までの彩香との関係もぶち壊してしまうほどの迫力ある言い方に、驚き固まってしまった。

彩香「私が競泳コーチとしてアルバイトしていた頃に言われた一言です。」

笑顔に変えた彩香を見て、晴人は「それでそんな言い方をしたのか……」と心で納得をした。

晴人「えっ??それじゃ森下コーチは、競泳のコーチをやった事があるんですか??」

彩香「ええ。1年だけですけど。その時、指導方法を教わっていたコーチに言われた一言。それが、さっき言った『自分が選手だった頃の練習をやっても駄目だぞ!』です。私も小さい頃から水泳をやっていた選手上がりのコーチなんです。水元さんの選手時代見たく、いい結果は出せていませんけど……。」

少しの間をおくと、彩香は懐かしく振り返るような表情を見せた。

彩香「……今日の水元さんを見ていて、同じだなんて……あの時の私と。」

深刻な顔でうつむき、その心境を語りだす晴人。

晴人「……そうなんですよね。選手時代にやらされた事をただやっているだけ……でも、今の自分にはそれが精一杯の指導なんです!それ以外の練習方法なんて、指導経験がない自分にはまったく思いつかない!それでもやっぱり、選手達の言う通り……当時の自分と今の彼らでは、出来る練習のレベルが違う。選手に言われて始めて気づかされるなんて……ほんと情けないよ……。」

自分の非力さを痛感する晴人。そんな、晴人を見て彩香が元気づけるような明るい顔を見せた。

彩香「実は今日、私が1年間競泳指導を教わっていたコーチと呑みに行くって話しになってるんです。もし良かったら……一緒に緒に行きませんか??」

一瞬立ち止まり、悩み考える晴人。

このままでは確実に、また信頼を失い選手との距離が広がってしまう。指導経験のない浅はかな知識。自分自身がコーチとして成長をしなければならぬ。その為にも、本物の競泳コーチから、本物の競泳指導を学ぶ必要があるのは明らかだった。その事の重大さが分かっている晴人は、一際重く意志の強い表情に変え答えた。

晴人「ぜひ・・・お願いします！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7853x/>

---

スィム魂

2011年10月28日11時08分発行